

女子短大生における書字速度, 学力, 自己効力感, コーピングスキルの関連

Relationship of Handwriting Speed, Academic Ability, Self-Efficacy and Coping Skills in Women's Junior College Students

河野 俊寛, 辰島 裕美
Toshihiro KONO, Yumi TATSUSHIMA

〈要旨〉

女子短大生130人の書字速度, 学力, 自己効力感, 及びコーピングスキルとの関連について調査分析を行った。書字速度は「小学生の読み書きの理解」, 学力は4月初旬の入学時オリエンテーションに実施している, 国語, 計算, 英語のプレースメントテスト, 自己効力感は「特性的自己効力感尺度」, コーピングは「3次元モデルにもとづく対処方略尺度」をそれぞれ使用して測定した。書字速度, 学力, 及び自己効力感には相関は認められなかった。自己効力感を低群, 平均群, 高群の3群に分けて, 「3次元モデルにもとづく対処方略尺度」の下位尺度の差を検定すると, 「放棄・諦め」と「責任転嫁」は1%水準で低群は平均群と高群よりも有意に高く, 「肯定的解釈」は1%水準で低群は平均群と高群よりも有意に低く, 「計画立案」は5%水準で低群は高群よりも有意に低かった。複数の要因を把握した支援の必要性を考察した。

〈キーワード〉

女子短大生, 書字速度, 学力, 自己効力感, コーピングスキル

1 目的

中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ(2014)(以下, 短期大学ワーキンググループ)は, 短期大学の課題として, 基礎学力が不十分な学生等の増加に伴い, 一人一人の学生の課題へのきめ細かな対応が一層必要な状況にあることをあげている。このような課題に対応するためには, 学生の実態を知ることは重要である。これまでも, 学習動機, 自己効力感, コーピング等を個別に取り上げた研究はある(陳, 2010; 南・矢花・岩田・船越・長島, 2007; 山田・天野, 2003)。しかし, 学生の実態を, 学力と心理特性との関連で調査した研究は少ない。今回, 女子短大生の書字速度, 学力, 自己効力感, 及びコーピングスキルとの関連について調査分析を行ったので報告する。

2 方法

2-1 対象者

A 短期大学1年生の女子学生143人を対象とした。分析は, 調査日に欠席等をしたためにデータが欠損した学生を除外した130人について行った。データ収集は, 本論文の

著者の一人である辰島が中心となり, 短期大学の教員の協力を得て行った。

2-2 書字速度

書字速度は, 「小学生の読み書きの理解(URAWSS)」(河野・平林・中邑, 2013)(以下, URAWSS)の書字検査を使用した。

URAWSSは, 学習障害の診断・評価に必要な読み書きの正確さと流暢さのうち, 読みと書きのそれぞれの流暢さが測定できる検査である。対象は, 小学1年生から小学6年生までである。書字検査は, 各学年用の文章課題を, 「できるだけ速く, でもていねいな字で書いて下さい」という指示で, 3分間視写することになっている。訂正は, 3分間の書字時間を確保するために消しゴムを使わず, 取り消し線を引く等で行うことになっている。1分間に書けた文字数を書字速度として測定している。URAWSSは, 個別でも集団でも可能であり, 集団実施が可能であることが, 本検査の大きな特徴である。

現在, 日本には小学生以降を対象とした読み書き検査は存在しない。しかし, 本検査の6年生課題を使った, 高校

生や成人を対象とした研究報告があることから（江田・平林・河野・中邑，2012；河野・岡部・嶋・松川・大口，2013；河野，2014），本研究においても，上記の先行研究を参考にして，小学6年生の書字課題を使用し短大生に実施した。書字時間は，江田ら（2012）の成人の平均値及び標準偏差から天井効果の可能性が考えられたので，標準の3分間ではなく2分間で実施した。その他の手続きは，標準実施法に従った。実施は，4月に対象者を2回に分けて集団で行った。

2-3 学力

学力は，4月初旬の入学時オリエンテーションに実施している，国語，計算，英語のプレースメントテストの得点をそのまま使用した。それぞれ30分間で実施した。国語の問題は，漢字の読み書き，文学史の知識，文章読解，文法等々についてであった。計算は，計算問題，図形の面積，文章問題，一次関数等々であった。英語は，1文中の括弧に適切な語を選択する問題，及び，会話文の完成問題であった。

2-4 自己効力感

自己効力感とは，Bandura（1977）によって提唱された概念で，一定の結果に導く行動を自らうまくやれるかどうかという自信のようなものとされている。本研究では，自己効力感の測定に，「特性的自己効力感尺度」（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995）を使用した。

この尺度は，Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs and Rogers（1982）のSelf-Efficacy尺度の邦訳版であり，23項目の設問に対して，5件法で回答する。採点は5件法の回答にそのまま1点から5点を割り当て，14項目ある逆転項目は得点を逆転して合計得点を算出する。可能な得点範囲は23点から115点で，得点が高いほど自己効力感が高いことを示している。成田ら（1995）によると，Rosenberg（1965）や星野（1970）の自尊心尺度との間に有意な正の相関が認められている。実施は4月に集団で行った。

2-5 コーピング

コーピングとは，Lazarus and Folkman（1984）の心理的ストレスモデルによると，ストレスからストレス状態に陥るまでの一過程を指す。心理的なストレスは，ある出来事に対し，ストレスフルな出来事であるか否か判断し，ストレスフルと見なされればストレス状態に陥らないための方略を選択し（認知的評定），実際にストレスに陥らないように対処（コーピング）することで，ストレス状態を回避しようとする。本研究では，コーピングに関して

は，「3次元モデルにもとづく対処方略尺度」（神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野，1995）の尺度を使用した。

この尺度は，ストレスに対するコーピングの分類次元として，①問題焦点（具体的問題解決か）－情動焦点（情動の調整か），②接近（積極的に問題に関わるか）－回避（問題に対し回避あるいは無視して距離を置こうとするか），③認知（認知的な反応か）－行動（行動的な反応か）の3つの軸を設定し，それらの組み合わせで構成される8象限について，8つの下位尺度（①情報収集②放棄・諦め③肯定的解釈④計画立案⑤回避的思考⑥気晴らし⑦カタルシス⑧責任転嫁）で構成されている。回答は5件法で，採点は5件法の回答にそのまま1点から5点を割り当て，下位尺度ごとに合計得点を算出する。可能な得点範囲は0点から15点までで，得点が高いほどそのスキルが高いことになる。実施は11月に集団で行った。

3 結果

3-1 得点分布

書字速度，学力，自己効力感，コーピングの得点分布を図1から図13に示す。

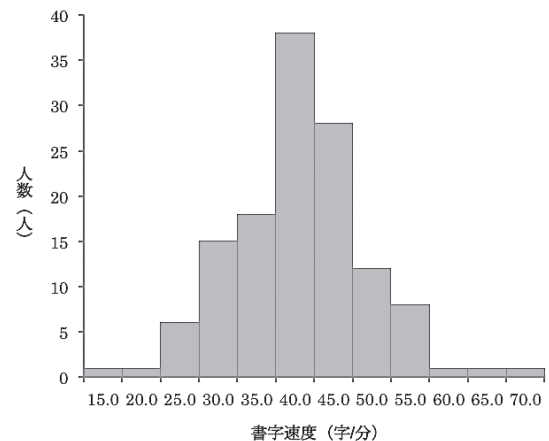


図1 書字速度

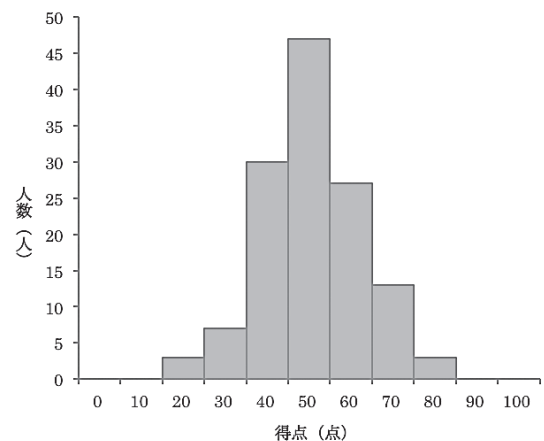


図2 国語

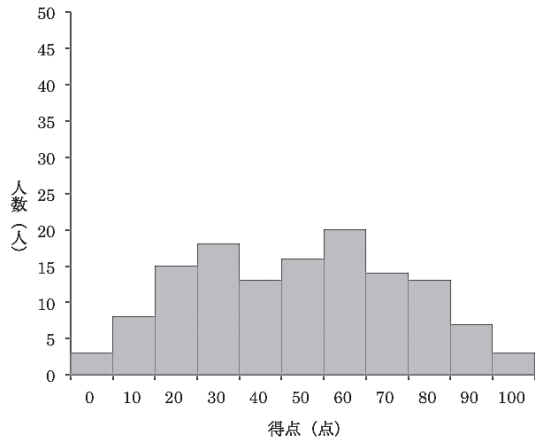


図3 計算

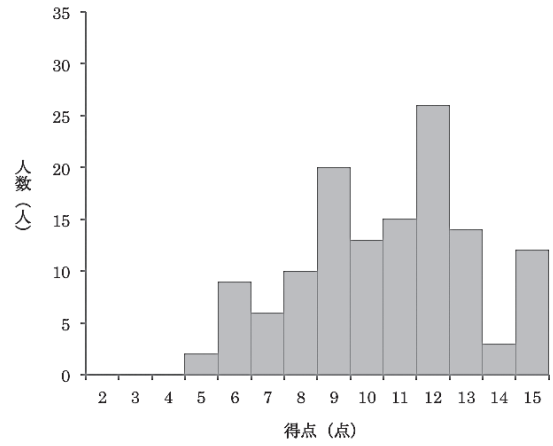


図6 カタルシス

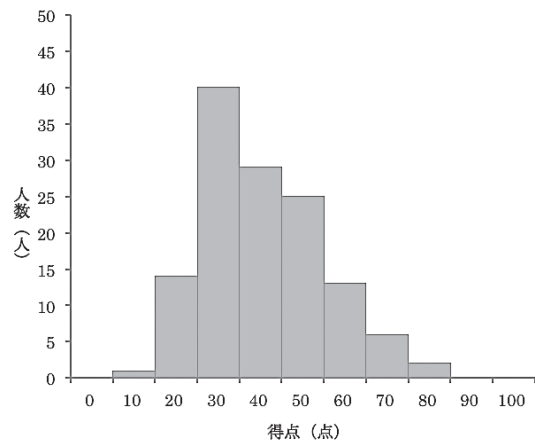


図4 英語

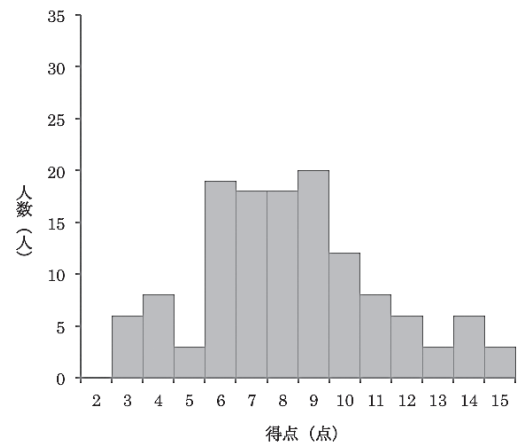


図7 放棄・諦め

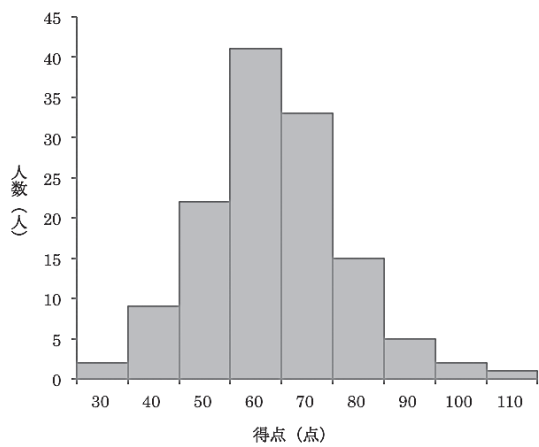


図5 自己効力感

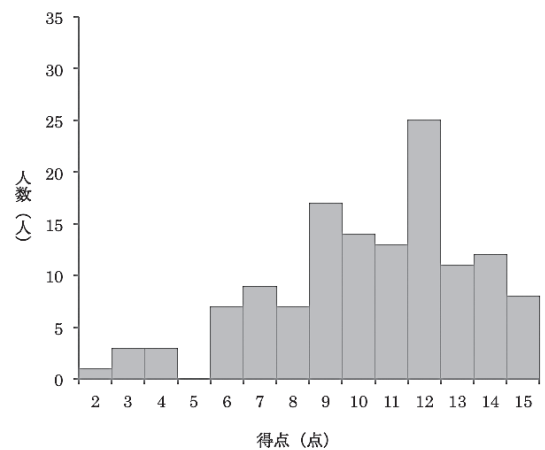


図8 情報収集

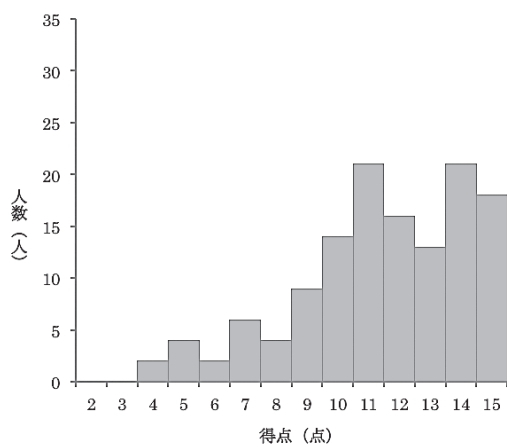


図9 気晴らし

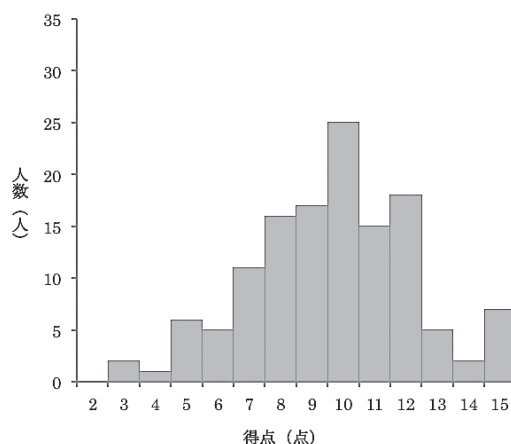


図12 計画立案

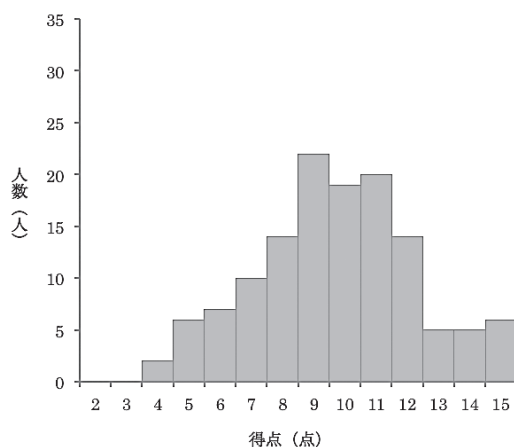


図10 回避的思考

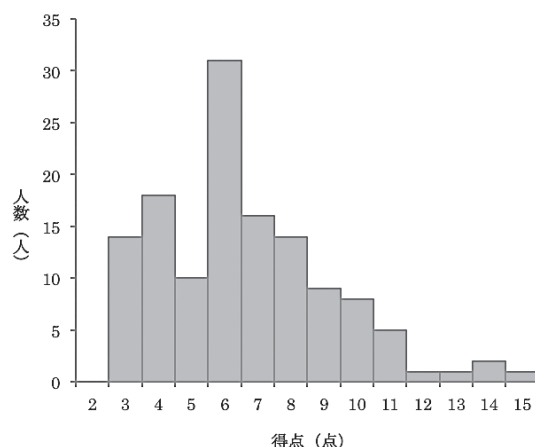


図13 責任転嫁

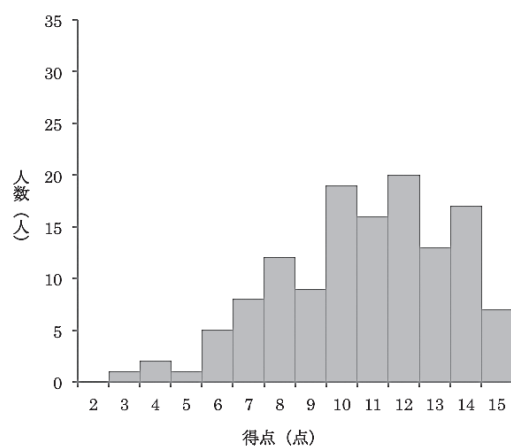


図11 肯定的解釈

3-2 書字速度、学力、自己効力感の関連

書字速度、学力、及び自己効力感について、Pearson相関分析を行った。その結果、相関が見られた項目はなかった。

3-3 自己効力感によるグループ分け

「特性的自己効力感尺度」の得点を、18歳から24歳の女性の平均値（清水，2001）から $\pm 1SD$ 以内を平均群、 $-1SD$ 以下を低群、 $+1SD$ 以上を高群とした。その結果、低群60名、平均群59名、高群11名であった。

3-4 自己効力感によるグループ差

自己効力感のグループによる、書字速度、試験成績、コピーングスキルの下位尺度の差について、それぞれ自己効力感グループを要因とする1要因分散分析を行い、有意差を認めた場合はTukey-KramerのHSD検定を行った。

その結果、1%水準で有意であったのは、「放棄・諦め」

($F(2,127) = 8.74$), 「肯定的解釈」($F(2,127) = 6.27$), 及び「責任転嫁」($F(2,127) = 6.94$)であり, Tukey-KramerのHSD検定の結果, 「放棄・諦め」と「責任転嫁」は, 低群は平均群及び高群よりも有意に高く, 「肯定的解釈」は, 低群は平均群及び高群よりも有意に低かった。平均群と高群には差が認められなかった。5%水準で有意であったのは「計画立案」($F(2,127) = 4.17$)であり, Tukey-KramerのHSD検定の結果, 低群は高群よりも有意に低かった。書字速度, 試験成績, 「カタルシス」, 「情報収集」, 「気晴らし」, 「回避的思考」にはグループ間の差は認められなかった。

自己効力感による3グループ別の, 書字速度, 試験成績, 及びコーピングスキルの8つの下位尺度を, 図14から図25に示す。なお, 箱ひげ図は, 箱の下端, 中央, 上端はそれぞれ25%タイル, 中央値, 75%タイルを示している。箱の長さの1.5倍以上の値を外れ値として×で示している。外れ値を除いた最大値, 最小値をそれぞれのひげの上端, 下端として示した。

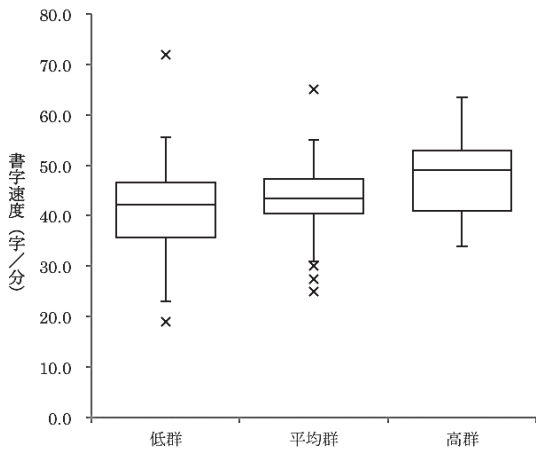


図14 書字速度

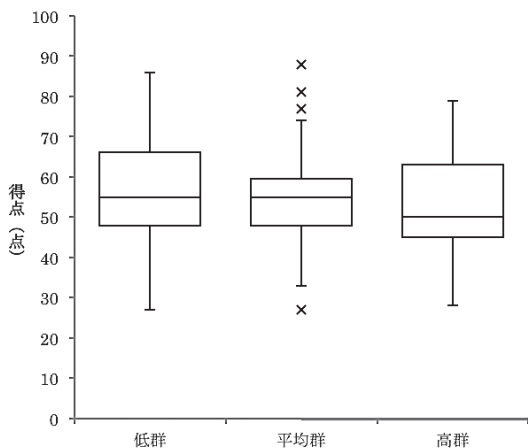


図15 国語

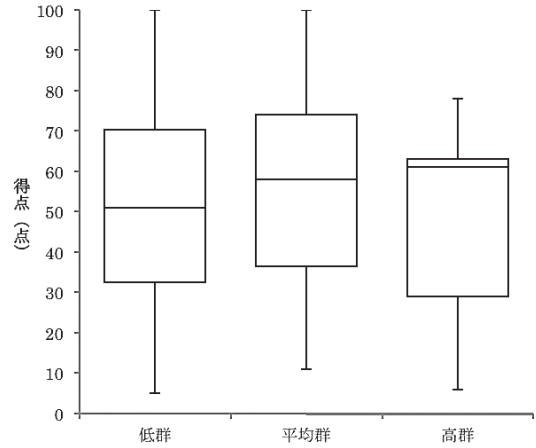


図16 計算

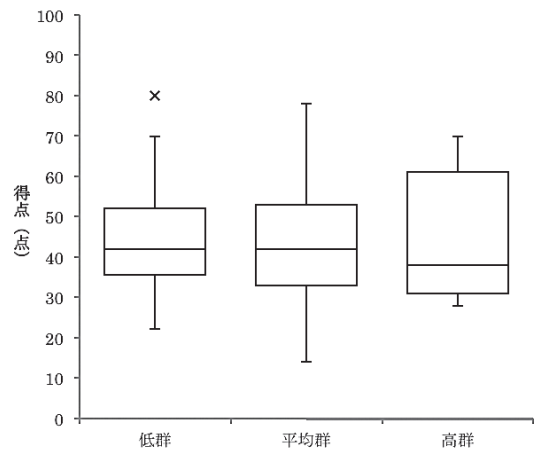


図17 英語

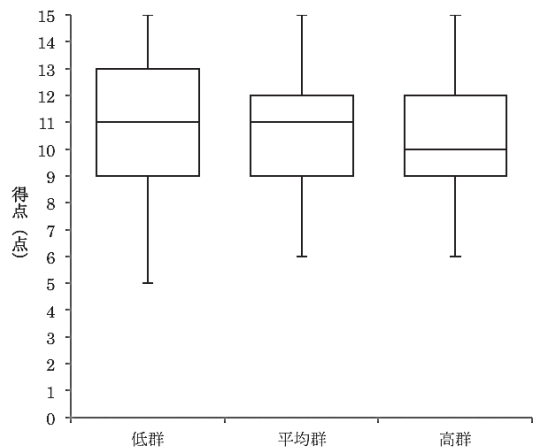


図18 カタルシス

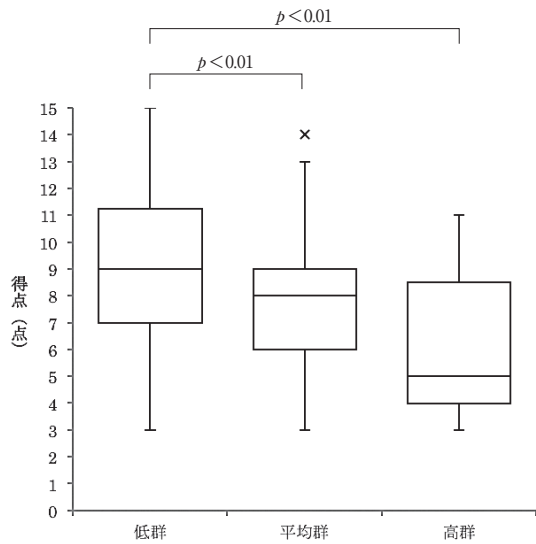


図19 放棄・諦め

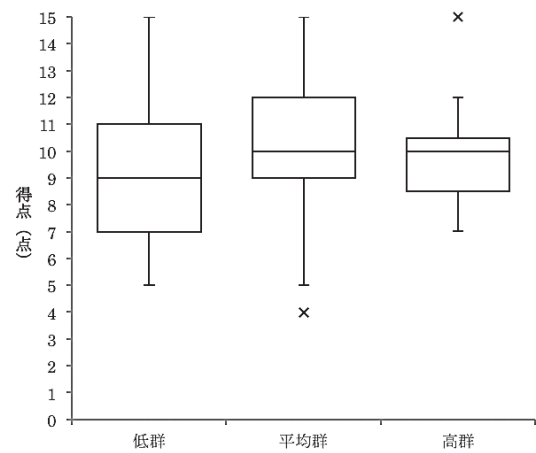


図22 回避的思考

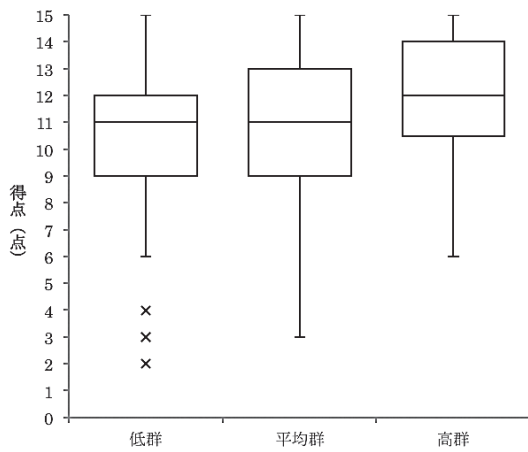


図20 情報収集

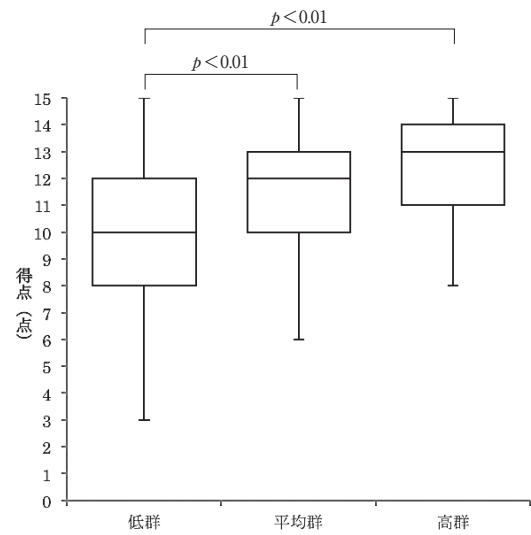


図23 肯定的解釈

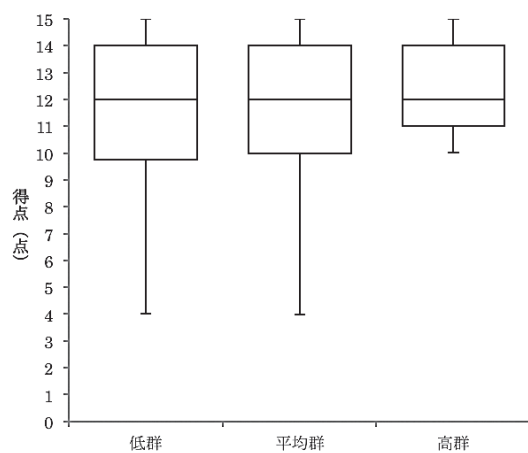


図21 気晴らし

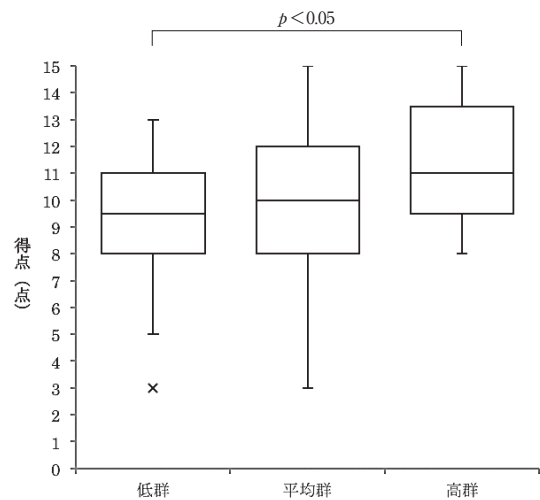


図24 計画立案

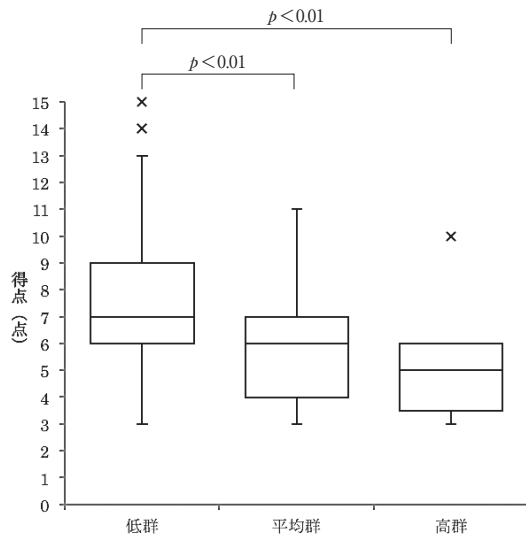


図25 責任転嫁

4 考察

4-1 書字速度と学力との関連

書字速度、英語、国語、計算における差は認められなかった。河野ら（2013）では、書字速度と学力との間に相関関係がある可能性が指摘されていたが、本研究の結果は異なった。河野ら（2013）は、高校生を対象としており、短大生や大学生では書字速度と学力との関係は少なくなることを示しているのかもしれない。書字速度関連の研究は少なく、今後の課題としたい。

4-2 自己効力感とコーピングの下位尺度との関連

自己効力感に関しては、「3次元モデルにもとづく対処

方略尺度」を作成した神村ら（1995）によれば、8下位尺度の2因子分析では、①問題解決・サポート希求（情報収集、計画立案、カタルシス）、②問題回避（放棄・諦め、責任転嫁）、③肯定的解釈と気そらし（回避的思考、肯定的思考、気晴らし）の3因子構造になっている。この3因子構造を、本研究における自己効力感による3グループに当てはめると、自己効力感低群は、問題回避に該当する「放棄・諦め」と「責任転嫁」が、他の2群よりも有意に高かった。また、肯定的解釈と気そらしに該当する「肯定的解釈」は他の2群よりも、問題解決・サポート希求に該当する「計画立案」は高群よりも有意に低かった。

このように、自己効力感とコーピングタイプには関連があることが本研究で示された。自己効力感とコーピングタイプの因果関係は不明であるが、間・筒井・中嶋（2002）は、逃避的コーピングは、精神的に負の影響を与えることを報告していることから、コーピングタイプが自己効力感に影響を与えている可能性は考えられるであろう。

しかし一方で、坂野（1996）は、自己効力感は操作が可能であり、それによって、行動変容を促す事ができることを指摘している。また、平田（2010）は、コーピングタイプだけを知ることができれば、適切な援助ができるわけではない、と指摘している。これらの指摘からは、コーピングタイプや自己効力感のみを対象にした支援ではなく、本研究で試みた、学力も含めた複数の要因を探ることの重要性を示唆しているといえるであろう。学生の複数の要因を明らかにした上での支援が、短期大学ワーキンググループ（2014）が指摘している、一人一人の学生の課題へのきめ細かな対応へとつながっていくことが期待される。

参考文献

- 間三千夫・筒井孝子・中嶋和夫（2002）母親の育児ストレス・コーピングと精神的健康の関係。信愛紀要, 42, 54-58.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy toward a unifying of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 陳惠貞（2010）短大生における学習動機と仮想的有能感—持続性の視座から考えて—。子ども学研究論集, 2, 25-36.
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ（2014）短期大学の今後の在り方について。（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/_icsFiles/afiedfile/2014/09/18/1351882_03.pdf [2015年12月9日取得]）。
- 江田裕介・平林ルミ・河野俊寛・中邑賢龍（2012）特別支援学校（知的障害）高等部に在籍する生徒の視写における書字速度と正確さ。特殊教育学研究, 50, 257-267.
- 平田祐子（2010）コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向—社会福祉実践への応用に向けて—。 *Human Welfare*, 2, 5-16.
- 星野命（1970）感情の心理と教育。児童心理, 24, 1445-1477.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二（1995）対処方略の三次元モデルと新しい尺度（TAC-24）の作成。教育相談研究, 33, 41-47.
- 河野俊寛・平林ルミ・中邑賢龍（2013）小学生の読み書きの理解。こころリソースブック出版会。
- 河野俊寛・岡部康英・嶋美紀・松川真理子・大口佳代子（2013）高校生の書字速度及び読みの流暢性—A県立高校3校の1年生の書字速度測定課題及び単語探索課題の結果から—。LD研究, 22, 476-483.
- Lazarus, R. S. and Folkman, S. (1984) *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer.

- 南正信・矢花光・岩田裕美・船越利代子・長島緑（2007）福祉系短期大学生の進路選択過程における自己効力感と大学選択動機との関連. 紀要, 35, 91-96.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子（1995）特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る. 教育心理学研究, 43, 306-314.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 坂野雄二（1996）セルフ・エフィカシーと行動変容. *こころの科学*, 53, 90-96.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., and Rogers, R. W. (1982) The Self-Efficacy Scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- 清水裕（2001）特性的自己効力感尺度. 堀洋道監修/山本真理子編, *心理測定尺度集I*, サイエンス社, 37-42.
- 山田ゆかり・天野寛（2003）大学生におけるストレスとコピーング. *名古屋文理大学紀要*, 3, 1-11.